

にらんでゐる、逃げ出す譯にもゆかすとたんにいのちが縮まつたやうでした、とんだところを親方にみつかつて」

菊五郎はどんな顔をして聞いてゐたか、それはうつかりと聞き洩らしてしまつた。

この三世菊五郎は嘉永二年四月遠州掛川で六十六歳を以てこの世を去つた。この三代目の娘と十二世市村羽左衛門との間に出来たのが五代目の尾上菊五郎である。

亡友山内陵風君にこの一篇を手向ける、生前君の交誼に何一つ報ゆるところを知らなかつた僕はせめてこの拙い一篇を君に捧げて地下の君が微笑を以て讀んでくれるであらうことを思ひ合せて纔に自ら慰める、君が好きだつた松鶴君が「上方はなし」を出してゐると聞けば君も喜んで原稿を書いてくれたゞろうし僕も亦いろ／＼と書かせたことゝ思ふ、しかしこれも今は果敢い望みに終つてしまつた、あれを思ひこれを思ひ流石に涙なきを得ぬ、謹んで君の冥福を祈る、君の五十日祭近く、……萬里生。

【新刊照會】『西國三十三所巡拜通誌』中卷。西國三十三所の由來、同じく佛像寶

物の因縁等を、著者の該博なる知識と、敬虔なる信仰的熱意を以て縷述せられたる

もの、和装の精妙を極めたる装幀と相俟て、斷然類書を壓する好文獻である。(梅

原忠治郎氏著、京都市上京區紫野下鳥田町四三、梅原書店發行、定價一、四〇送九)



借家怪談

五世 笑福亭 松 鶴

エーよく申しませんが、まつすぐに、かたげがよんだかしやふだ、貸家札と言ふものは、あんまり、まずぐには、張つてないもので、皆歪めてはつてます、二枚張つて有るのは、外から見ると人と云ふ字で内から見ると入ると言ふ字、人が入ると言ふのやそふで、松鶴は借家を持つた事がないで、知りまへんがそうやそふで、これは在る裏長屋「エーチョット、おたづねしますが」「ハイ どなた」「へい、おとなりの空家を借りたので、お家主さんは、お近くだすか、又は遠方だすか、チョット お尋ねいたします」「アー となりの貸家をお借りなさるのか、家主は安治川の三丁目や」「ゑらい遠方だすなア 此の邊に家守りさんはござりませんか」「ハイ 家守と言ふてはないが萬事は私が引受けて居ます」「それはゑらい好都合で、間取りはどう言ふ間取りになつてます」「私の方と、同じ間取り、奥が四疊半で、臺所が三疊に、押入があつて這入つた所が土間で右手が走り元に成つてます」「いま表の格子の間から、チョット見ましたが、なか／＼勝手好うしておますなア、それで、敷金はどの